

《書 評》

郭洋春・戸崎純・横山正樹編
『脱「開発」へのサブシステム論
－環境を平和学する！ 2－』法律文化社，2004年

真 実 一 美

本書は、私にはきわめて意欲的で刺激的な論文集であると感じられた。これに先行して2002年に、著者たちは『環境を平和学する！－「持続可能な開発」からサブシステム志向へ－』という研究書を出している。本書はこの研究をさらに発展させようとしたものであるという。しかし、ここでは本書によって受けた新鮮な衝撃と感想を簡単に述べるにとどめたい。この著書は平和学の研究書であるが、経済学、とりわけ開発途上国経済や環境経済についての示唆に富んだ言及が多く見られる。それで、とくに経済学と環境問題に関連した部分を中心に取り上げて紹介したい。このような領域の他にも、ジェンダーや安全保障などの問題も取り上げられているが、これらの部分には基本的には触れないことにする。

本書の構成は以下のようになっている。

序章 開発主義の近代を問う環境平和学

第Ⅰ部 環境と開発の調和論を超えて－サブシステム志向の平和創造－

第1章 開発から脱開発の時代へ－開発主義の批判的検討－

第2章 環境問題アプローチの批判的検討

第3章 ジェンダーと環境－「生命と社会の再生産」－

第4章 オルタナティヴとサブシステム視座

第5章 オルタナティヴ諸理論との交差と共鳴

第Ⅱ部 開発パラダイムを超えて－オルタナティヴなビジョンと運動・実践の展開

第6章 今日のグローバリゼーションの起源と本質

第7章 反グローバリゼーションのグローバル化

第8章 環境破壊に対抗する「グローバル・ネットワーク」とサブシステム－鉦山史から見た
グローバル・ネットワークの史変遷とその可能性－

第9章 地域自立の社会システムとサブシステム

第10章 「核による安全保障」とサブシステム－マーシャル諸島のロンゲラップ環礁民から問
う－

第Ⅲ部 サブシステム志向と地球社会の平和創造

第11章 国家安全保障からサブシステムの安全保障へ

第12章 近代世界システムを超えて

終章 サブシステム志向の世界像

まず序章では、この本のキーワードである開発主義とサブシステムの定義が前作を踏まえながらなされている。開発主義という言葉はさまざまな人によって使われている。例えば、ヴォルフガング・ザックス¹⁾もこの言葉を使っているが、本書の第2章と共通する開発主義の歴史的検討をおこなっているにもかかわらず、明確な定義はおこなっていない。評者も、インドの環境問題と開発について論じた際に²⁾、開発主義という言葉を使っているが具体的内容については、まったく触れていない。本書はこの開発主義という言葉に明確な定義を与え、議論の中心に据えている。ここでは、開発主義は次のように定義されている。「経済開発こそが最も重要でかつ達成可能な政策であるとする観念の枠組み、すなわち『開発パラダイム』が第二次世界大戦後の世界を覆った。『開発パラダイム』を疑うことのない前提とし、開発を諸政策の最優先目標に掲げて国家的な動員をはかるイデオロギーが開発主義 developmentalism だ」(2ページ)と。開発主義は快適さや便利さを求める志向により支えられており、これに支えられた開発主義の普及とともに既存の貧富の格差は増大し、各地の環境や共同体は破壊されてきた。そして、グローバリゼーションはこのような開発主義が世界の隅々にまで及ぶことである。こうした状況を変えていくためには「快」を追求するのではなく、暴力克服と平和達成のための志向枠組み「平和パラダイム」の追求が必要である。サブシステムについては「個と集団の本来性を発展させ、類として永続させる諸条件の総体」(4ページ)と定義されている。この諸条件とは、生命維持のための物質的条件に加えて環境および社会的諸条件も含まれるとされている。そしてこの本で試みられている環境平和学の追求は近代そのものの問い直しであるとされている。

第I部は開発主義やサブシステムの概念を批判的に検討し、オルタナティブの探求を試みている。第1章では、開発主義を歴史的検討に基づいて検討し、問題を指摘している。第2次世界大戦後、開発という概念がアメリカ合州国大統領トルーマンによって提唱され、合州国の世界戦略を正当化し、自己の影響力を強化するために利用されてきた。この説明は、先のザックスやダグラス・ラミス³⁾などと同様であると感じた。この開発主義の目標は合州国型の社会と生活様式の確立である。そして開発主義はこのような状況を実現するために開発途上国の社会変革、つまり伝統社会や価値観などの変革、ようするに破壊をおこなうことを意図していた。しかし、「現代における開発主義の誤謬は、元来人間が生きていくうえで必要な(文字通りの)経済活動の場を市場と同一視し、市場が未成熟な地域・共同体を遅れていると差別し、それを機能するように『開発』しようとするところにある」(20ページ)とここでは指摘されている。開発主義が強固であるのは、それが人々の生活様式と意識にまで浸透しているからである。だが、開発主義は結局南北格差の拡大や飢餓や貧困を増大させてきた。その理由は、開発が環境や社会関係などを考慮しない「人間不在の開発」であったからであるとしている。第2章では環境問題の批判的検討がおこなわれている。さまざまな環境変化が環境問題として表面化するか否かは、これにかかわるさまざま主体の間の力関係が大きく影響している。

たとえば水俣病や香川県の豊島の産業廃棄物問題はこのようなものであろう。これらの場合も公害の第1の犠牲者あるいは被害者は弱く貧しい住民であった。第4章はオルタナティヴとしてのサブシステムスが扱われている。従来はサブシステムスは否定的な意味を持つものとして使われてきた。しかし近年、イヴァン・イリッチやマリア・ミースによって積極的な意味をもって使われるようになった。イリッチは「サブシステムスを市場経済に依拠しない『人間生活の自立と自存』の状態にとらえている」(62ページ)。マリア・ミースは「下からのパースペクティヴ」によって、支配階級の生活様式に惑わされることなく、サブシステムス経済の豊かさを見直し、新たな社会を模索しようと試みている。そして、彼らは市場経済の下での「自然の再生能力を破壊し、自然を消尽する」(69ページ)開発を意識的に拒否することを提案しているのであると述べられている。

第Ⅱ部では、グローバリゼーションをめぐる検討を通じてオルタナティヴを模索している。第6章はグローバリゼーションの歴史的検討である。グローバル化は資本主義にとって本質的な性質であり、植民地支配もそのようなものであったが、今日のグローバリゼーションは1970年代のIMF・GATT体制の崩壊に起点を持ち、冷戦終焉や東欧・ソ連社会主義体制崩壊により大きな進展を見せた。しかし、それはあくまでも経済のグローバル化であり、「経済のグローバル化は万物の商品化でもあって、人びとや自然を市場に従わせる。だが市場経済化によってすべての人びとが等しく市場に参加でき、等しく扱われるのではない」(100ページ)し、そのために貧富の格差は一層拡大してゆくとしている。第7章では、グローバリゼーションは世界社会フォーラムのような対抗運動を生みだし、そのグローバル化をもたらしていることが指摘された。そして、グローバリゼーションの克服策として、参加型民主主義に基づくオルタナティヴが模索されている。そして現状を次のようにまとめている。「今日のグローバリゼーションは、……資本のグローバル化の中枢に吸引され秩序づけられる部分と、そのプロセスから周辺化されていくマージナルな部分との二極化を示しているのではないだろうか。『グローバルな北』と『グローバルな南』の出現である。多国籍企業や金融資本を動かす資本家層や高度専門家層、それと連携しそれを支える官僚層（および国際官僚層）が『グローバルな北』の『地球市民として君臨』し、グローバルな権力構造を形成するようになったのだ」(110-111ページ)と指摘している。第9章では、このような対抗運動としてのサブシステムスが取り上げられている。ここではインドネシアの大規模造林計画と住民の対立を通して、木材資源のための大規模植林と生活基盤（サブシステムス）のための森林という森林の2つの機能が論じられ、しばしば海外援助機関は後者を評価する視点を持たないという指摘がなされている。インドの事例では、住民の地域自立を通じた自治管理能力の形成が論じられている。住民たちは外部（政府）の開発計画を拒否し、自分たちの協力により自分たちの直面しているさまざまな問題を解決することを選択してきたという。3つ目は出産における近代医学による医療化が専門家による出産管理と生む者の主体性の喪失として紹介され、女性の主体性や身体性の回復の必要が説かれている。これらの事例の検討を通して、市場により遮断された関係性を取り戻すことの必要性が指摘されている。

第Ⅲ部では新たなパラダイムとしてのサブシステム志向の形成が論じられている。ここでは世界市場と国家を取り上げオルタナティヴの可能性を検討した第12章を取り上げる。ここでは資本主義ないしは近代世界システムのオルタナティヴとしてのサブシステムスの有効性の検証も目指されてい

る。これまでの社会主義のようなオルタナティブは政治権力の奪取を重要な方法としていたが、サブシステム志向では権力の奪取によらず、地域の自立性を高め、市場（経済）や国家（政治）から離れることで抵抗しようとしているという。ここではイマニュエル・ウォーラーステインに依拠した資本主義理解がなされている。つまり、資本主義世界においては商品は国境を越えて自由に移動し取り引きされるが、労働力は国境を越えた移動を制限されている。多くの開発途上国では労働者は農村とのつながりを維持しているために、それを持たない労働者よりも少ない賃金で働くことができる。このような労働者を半プロレタリアと呼ぶが、これは市場経済の浸透とともに必然的に減少してくるのである。このようにそれぞれの国における市場経済の浸透の度合の違により、賃金は国によってことなっている。しかし、このような半プロレタリアの多く存在する周辺部を不断に資本主義世界経済は発展のために引き入れていくことが不可欠である。つまり、このような半プロレタリアの存在するサブシステム領域は資本主義の維持・延命にとってなくてはならないものである。しかし、このことはこの領域を強化しようとするサブシステム志向の運動がかえって資本主義の維持を助ける役割を果たしてしまうというパラドックスに直面することにもなる。それではどのようにしてオルタナティブとしての地域自立を達成するのかということについては、ブランド商品に対する欲望のような資本主義的欲望を再編成し、民衆の自律性に基づくものに変換していくこと、つまり共同体による欲望の再編成が必要であるとしている。

終章では、サブシステム志向の世界像が検討される。ここでは地域主義、コモンズによる資源の共同管理と民主主義の重要が指摘されている。

本書の十分適切な紹介ができたかどうかは心もとないが、とりあえず私の関心に従って紹介を試みてみた。以上に見てきたように、本書は開発主義、サブシステムなどの概念を定義し、かつそれを駆使することで、平和学、経済学、政治学、環境問題、フェミニズムなどの多分野にまたがる研究において新たなパラダイムを打ち立てようとした意欲的な試みである。そのスケールの大きな試みには、感銘せざるを得ない。また、本書が詳細な検討をおこなった開発主義やサブシステムという概念はさまざまな分野の研究においてこれから大いに貢献するに違いないと感じた。

しかし、私にはいくつか疑問あるいは十分に理解できないところもあったので、それも述べておきたい。まず第一には、オルタナティブとしてのサブシステムの曖昧さである。本書ではさまざまな執筆者が、多様な問題について詳細に説明をおこなっている。しかし、オルタナティブな社会のイメージはそれでもやはり明確ではないように思われる。だが、これは、未来の予測に関することでもあり、ないものねだりなのかもしれない。また、第1章では、開発主義をアメリカ合州国の利益のために合州国により創り出され、広められたとしている。こういう側面は否定できないし、ここで述べられた歴史的事実は否定できないこともたしかである。しかし、このような資本主義に対するオルタナティブであった当時のソ連を中心とする社会主義圏も開発主義という点では全く同じではなかったのではないだろうか。また、第三の道を歩もうと試みた多くの非同盟開発途上国もまた開発主義を自主的に追求していたように思われる。このような状況について、本書では全く言及がなされていないのは残念である。結局、第2次世界大戦後はそれがたとえ幻想でしかないとしても、ほとんどすべて

の国々が開発主義を意欲的に追求してきた。それゆえ，社会主義国や開発途上国も自ら積極的に「開発」を追求してきたといえる。そして，環境問題，つまり社会の環境的行き詰まりが多くの人々に認識されるまでは開発主義批判やサブシステムの見直しは世界のどこでも始まらなかったと言ってもよいのではないだろうか。

ともあれ本書の試みは刺激的である。これからの開発途上国経済や環境問題を議論する試みは，本書のように多分野にわたる目配りと個別の分野を越えた概念の有効性を要求されるように感じた。

- 1) ヴォルフガング・ザックス『地球文明の未来学—脱開発へのシナリオと私たちの実践—』，新評論，2003年，第1章『「開発」概念の歴史的検証』参照。
- 2) 真実一美『開発と環境—インド先住民族，もう一つの選択肢を求めて—』，世界思想社，2001年，178ページ。
- 3) ダグラス・ラミス『経済成長がなければ私たちは豊かになれないのだろうか』平凡社，2000年。